

常照

第799号

濁世を生きる立脚地

親鸞聖人は私たちの生きているこの社会を「濁世」「濁った世の中」であるとおっしゃいました。濁りに満ちた世の中こそが我々が生きている社会であるというのが親鸞聖人の見方です。そして濁った世の中だからこそ、その中を生きていく大切なよりどころが必要であり、それこそが仏さまのご本願の

教えであるということです。

私はご縁があって児童相談所に関わらせて頂いておりますが、相変わらず児童虐待の事例は減る傾向にありません。児童虐待をする人はほとんどの場合両親や養親です。つまり、私たちはいつの間にかエゴによって自分の最も身近な人すらも傷つけてしまっているのです。

私たちは今便利で明るい時代を生きてはいますけれども、こういう時代では世の中の闇の部分が一番弱い存在にしわ寄せされて現れてくるといふことです。自分中心

にものを考えて動いた結果、一番弱い所に様々な形で歪みが現れてくるのです。じつはその根っこには、仏さまの願いによっていのちを頂いていながら、いつの間にか自分で自分のいのちを生きっていると勝手に思い込むようになってしまったということがあります。

「共同社会」と「共感能力」

ゴリラの研究を通して人類の進化の歴史を辿っている京都大学総長の山極寿一先生は、人間が「人間」に進化したのは「共同社会」と「共感能力」という二つの能力

が備わったことによるとおっしゃいます。「共同社会」とは共に助け合い、共同体を作ることです。もう一つの「共感能力」とは共に感じ合う力です。赤の他人でも誰かが悲しみ苦しみ傷ついていたりすると、自分も心が悲しくなり、苦しくなる。これも人間だけが持つ能力です。私たちはお互いの悲しみや喜びを共有する力を持っているのです。だからこそ今日のよう to 発展し、「人間」に進化することができたのです。

ところが濁世を生きる我々は「自分さえよければ」という社会

を作ってきました。自分の喜びさえ得られれば他の人はどうなっても構わないとし、何か問題を起こしたならば「自己責任」と言います。本来人間は助け合わないと生きていけないし、助け合い相手の心を感じる力を持ったからこそ人間になってきたというのに、そうではない社会になってきているということは、そもそも人間らしい社会ではなくなってきたのだと、山極先生は述べられています。



随喜

仏教には「随喜」という言葉があります。それは「他の人の喜びが自分の喜びと感じられる心を持つことが最高の喜びである」ということです。逆に言えば「他の人の悲しみや苦しみが自分の悲しみや苦しみのように感じられる心」と言ってもよいかと思えます。それは「共感能力」と同じことなのだろうと感じます。そのような心こそが大切な仏教の心なのです。今まさに時代は濁世であって、その濁世を外に見て嘆いているだ

けでは仏教を学んでいることには
ならないのです。仏法を聴聞して
いる者は、その濁りを生み出して
いる張本人は「私」であるという
ところに立って、これは私自身の
課題だと見えるようになってい
く。これこそが実は仏法の教えに
触れたということなのです。



八月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 八月七日(金)～十一日(火)

休 座

○後期 八月十三日(木)～十六日(日)

兵庫教区朝来組 極樂寺

講師 軌 保 真 澄 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして
頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に
来院くださいますようお願いしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (〇一三四) 二二一〇七四四番
FAX (〇一三四) 二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一六一六番